

# DAY NIKKEI

## ミシンと日本の近代

アンドルー・ゴードン 著

ミシンという装置を中心に、19世紀末から1960年代にいたる日本の近代の多様な相貌を描き出すとは、なんとという力量だろう。面白く一気に読んだ。

ミシンは、日本の歴史の中でどのような意味を持っていたのか。日本の家庭に入った最初のミシンは、ジョン万次郎が母親への土産として持ち帰ったものだ。しかし、母はこの機械に失望する。着物は洗い張りをするために、ゆるく縫う。ミシンではそれができなかったからだ。和服と洋服つまり和洋のせめぎ合い日本の近代は、ミシンの存在と深くかかわっていた。

「世界初の成功した多国籍企業」といわれるシンガーミシン社が日本に入り込んだのは1900年。以後、30年ほどで、量産品のブランド商品を日本で販売する先駆となる。それは、アメリカという近代の象徴を所有したいという欲望



## 家庭と消費者の多様な相貌

の対象となる。また、家族の衣服を縫い、月賦の経済計画をし、ときには内職をする「良妻賢母」の姿がミシンに結びつけられた。婦人雑誌の「実話」記事が、それに「役買った」。「良妻賢母」は、日本の伝統ではなく、20世紀のグロバルな女性像であったという。戦争中には、「国民服」「標準服」をつくる装置となる。戦後、洋服が一気に広がり、巨大ビジネスとなる洋裁学校が生まれる。

実はミシンがもたらしたものは、それだけではない。ミシンを近代的な消費財として捉えるなら、その歴史は「消費者」の変遷とかわかっている。それを生産装置としてみるなら、女性の労働の問題が見えてくる。さらにいえば、ミシンの月賦販売システムから、クレジットや金融に関連する問題が浮上する。販売にかかわる労働者の運動(シンガー社の労働争議は戦前のもっとも長い争議の一つでもある)の歴史もかわってくる。アメリカ製と日本製との競合の問題もある。日本におけるミシンは、こうしたいくつもの問題をふくんだ装置となった。

著者は、その複合的な問題を丁寧に読み解くことで、他のアジア諸国とは異なる日本の近代化の独自性を描き出していく。内容にかざわしい実に行き届いた翻訳だ。

原題=FABRICATING CO  
NSUMERS  
(大島かおり訳、みすず書房  
・3400円)  
▼著者は62年生まれ。米ハー  
バード大教授。

デザイン評論家 柏木 博